

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520426

研究課題名(和文) インド中世前期におけるシヴァ教文学 一般信徒向け文献を中心として

研究課題名(英文) The Shaiva literature for the lay devotee in the early mediaeval India

研究代表者

横地 優子 (Yokochi, Yuko)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：30230650

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：インド中世前期のシヴァ教研究は、この数十年の間に新資料の発見が相次ぎ大きく進展している。本研究者はそうした新資料の中から、一般信徒向けにシヴァ神話を初めて体系化した『スカンダプラーナ』の校訂研究を行う共同プロジェクトに参加してきたが、本研究課題ではその成果として第31～69章の校訂研究を第2B巻(共著)と第3巻(単著)として刊行し、成立年代等の基礎的研究をほぼ完了した。また、同文献に言及される北インドのシヴァ教聖地の現地調査を行い、文献成立時のシヴァ教の広がりを遺跡等の歴史資料で跡付けた。加えて、長編詩『カピナ王の興隆』においてシヴァ教優位の下に仏教との共存が提唱されていることを解明した。

研究成果の概要(英文)：Studies of Shaivism in the early mediaeval India have been in big progress during these decades as a result of discoveries of new material. Of the newly discovered material, I have been participating in the internationally joint project of editing and studying the Skandapurana, the oldest work that systematized the Shaiva mythology for the lay devotee. Under the research task at issue, the two volumes covering chapters 31-69, volume 2B jointly and volume 3 singly, have been published, and the basic study of this text, such as the date of its redaction, has been completed. Going side by side with the textual study, the field research on some of the Shaiva holy places described in the text was done, and the textual evidence of the spread of Shaivism around the time of the redaction of this text (6-7th cent.) was verified by the historical and archaeological material. In addition, I have unravelled the idea of the integration of Buddhism into Shaivism in a poem called Kappinabhyudaya.

研究分野：サンスクリット文献学、古代・中世ヒンドゥー教

 キーワード：中世ヒンドゥー教史 シヴァ教 インド神話 プラーナ文献 サンスクリット文学 文献学 スカンダ
 プラーナ 女神信仰

1. 研究開始当初の背景

(1) インド中世前期(6~12世紀)において社会的に最も影響力をもった宗教は、シヴァ教と仏教である。この時代のシヴァ教文献は一般信徒向け文献と入門儀礼をうけた修行者・司祭向け文献に大別される。さらに、前者は神話・聖地の語りを中心とするプラーナ文献、一般信徒の生活規定を扱うシヴァ教法典文献、シヴァ神話・信仰に関わる美文学文献(詩・戯曲など)に、後者はパーシュパタ派などの超道文献と、一般にタントラと呼ばれているマントラ道の文献に分類される。いずれの分野においても、この数十年の間に新しい文献の発掘・校訂がすすみ、研究の進展が著しいが、特に後者のタントラ文献が学界の注目を浴びる一方で、前者の一般信徒向け文献については、その社会文化的重要性にもかかわらず、研究者の数が少なく十分に新資料を活用しきれていない。

(2) 本研究者は前者の新資料のうち、中世前期に大きな影響力をもっていた『スカンダプラーナ』の校訂研究を行う国際的なプロジェクトに1995年から参加し、主として女神神話・信仰に関わる部分の校訂と歴史研究を行ってきたが、これまでの科研費の研究課題にてその研究がほぼ完了したので、同文献の校訂研究を継続しながらも研究の視野を広げ、女神信仰をその重要な一部とするシヴァ神話・信仰全体の研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究者は、インド中世前期のシヴァ教について、研究が手薄である一般信徒向け文献を中心として、教義史・教団史ではなく、より広い文化史の視点から理解することを最終目的としている。しかし前述のように、現在は文献だけではなく碑刻文・考古資料も含めたさまざまな新資料がみつかり、全体的な歴史的総括を行う前に、個々の資料の厳密な研究が必要とされている。そのため、本研究ではまず『スカンダプラーナ』の文献研究と関連する遺跡調査を総合して、この文献の成立期(6~7世紀)の北インドにおけるシヴァ教信仰の広がり进行を明らかにする。さらにシヴァ神話の形成過程に関する概括的な研究を行い、今後のシヴァ教研究に関する展望を得る。並行して、シヴァ教に関わる美文学作品の中のいくつかをとりあげて、王権・宮廷文化との関係を検討する。

3. 研究の方法

本研究では特定の文献に対する文献学的に緻密な研究と、他の資料に関する概括的な研究とで構成される。

(1) 文献学的研究は以下の2点に絞る。A:『スカンダプラーナ』第3巻(第34, 53~69章)の完成と第2B巻(第31~52章)の校訂研究。これらはBakker教授(Groningen大学・オランダ)を主幹とするオランダ学術機構研究費による国際共同プロジェクト(NWO

360-63-050: A Historical Enquiry concerning the Composition and Spread of the Skandapurana)と共同ですすめる。本研究者も上記プロジェクトのメンバーとなっている。また、関連するシヴァ教聖地の遺跡などの現地調査も行い、文献成立時のシヴァ教の状況を総合的に把握する。B:長編詩『Kapphinabhyudaya(カッピナ王の興隆)』研究。シヴァ教と関わる美文学の中から、最近Michael Hahnによる新しい校訂本が出版され、ようやく本格的な研究が可能となったこの作品をとりあげる。この作品は仏教説話に基づきつつ、作者のシヴァ教信仰を第2の意味として包含した特異な作品であり、作品が著されたカシュミールの仏教とシヴァ教の競合・共存状況を探る手掛かりとなる。また中世カシュミールで著された他のシヴァ神話を主題とする美文詩に関しても、写本の収集等、今後の研究のための基礎的作業を行う。

(2) 概括的な研究は以下の2点である。C:中世前期のプラーナ文献におけるシヴァ教神話の形成・発展史。すでに研究に着手している『スカンダプラーナ』におけるシヴァ神話全体の構成を基に、他の中世前期のプラーナ文献中のシヴァ神話を調査し、前者の後者への影響関係を究明する。D:一般信徒のためのシヴァ教の教理と実践。シヴァ系のプラーナ文献やシヴァ教法典文献にみられる信徒の儀礼やヨーガの実践に関する記述を概括し、修行者・司祭向け文献にみられるものとの差異、影響関係を検討する。

4. 研究成果

(1) A:『スカンダプラーナ』研究

① まず過去の研究課題において全体の校訂・シノプシス・序論をほぼ完了していた第3巻については、ネパール写本3本の質の高い写真を新たに入手することができたため、それらを使って最終校合を行い、この作品の編纂過程に関する新たな考察を序論に加えて、2013年に単著として出版した(図書③)。今回の研究課題の主目的である第2B巻については、共同研究が当初の計画以上に順調に進捗し、2013年度中にはほぼ最終原稿を完成し、2014年に共著として出版した(図書②)。また、2012年1月には前述の国際共同プロジェクトのメンバーによって、同文献に言及される北インドのシヴァの聖地の合同調査を行った。その成果は、同文献成立時の歴史的背景に関する研究とともに、プロジェクトの総括として、主幹であるBakkerの単著として2014年に出版された(図書①)。この国際共同プロジェクトでもある『スカンダプラーナ』研究については、すでに出版されている第1巻、第2A巻に続き、今回出版した第2B巻と第3巻によって全体の約3分の1の校訂研究が終わり、また写本の相互関係や成立年代(図書③序論)、文献成立時の歴史的背景、当時の北インドにおけるシヴァ教

の広がり(図書①)など、基礎的研究はほぼ完了した。計画が予想以上に進捗したため、最終年度は次の第4巻のための準備作業にあて、その暫定的な成果を共同研究者のBisschop教授(ライデン大学・オランダ)とともにパリで開催されたワークショップにて報告した(学会発表⑤)。第4巻の校訂研究は、Bisschop教授と本研究者が中心となって進める計画である。

② 第2B巻前半には、同文献編纂時に北インドを支配していたハルシャ王の本拠地であるThanesar(Sthanesvara)の縁起譚、有名なダクシャ祭祀破壊神話など、重要なシヴァ神話がいくつか含まれている。Sthanesvara縁起譚はヴィシュヌに対するシヴァの優位を、ダクシャ祭祀破壊神話はヴェーダの神々に対するシヴァの優位を示す語りとなっており、この文献の編纂意図を如実に示している。また後者はシヴァとシヴァ妃による神々への神性顕現、神々がパーシュパタとなる挿話を含み、パーシュパタ派の影響が色濃く現れている。ただし同文献では、シヴァが雄牛を乗り物とする起源譚の枠組みの中でこれらの神話が語られており、この構成は他のプラーナ文献に類をみない。第2B巻後半部はUpamanyu, Sukesha, Kasthakutaという3人のシヴァ信徒の物語が中心となる。かれらはみシヴァへの一途な信仰の結果、各々の望みをかなえ、シヴァの眷属となり各々の楽土を与えられる。ここには解脱より信仰を重視する傾向が顕著である。一方、後半部で大きな部分を占めるのは、Sukeshaの物語の中に挿入された地獄の記述であり、13種の地獄と各々に落ちる罪の種類が詳細に語られている。この部分は、その内容にパーシュパタの教義に矛盾する要素を含み、シヴァ教内ではなく、ヴェーダ的(スマールタ的)文化内での伝承を源とすると思われる。また仏教の地獄の影響もみられる。この地獄の記述に関連して、第3巻の第56・57章に含まれている二つの挿話一罪を犯した7人のバラモンが漁師、鹿などに転生した後、解脱を獲得する話と貞節な妻の話一は、本来この地獄の記述に付属するものである。特に地獄の記述の最後に置かれる第52巻前半の規定一罪を犯しても地獄に落ちないバラモンの種類と地獄におちない女性の種類に関する規定一は、内容上二つの挿話に対応しており、挿話は規定の実例として意図されていたものであろう。したがって、この二つの挿話は本来規定のすぐ後におかれるはずが、第3巻で語られる、シヴァ妃の眷属となるSomanandinの前生譚として利用できると判断され、編纂の過程で現在の位置に移されて、前後の文脈に沿うように一部書き換えられたと思われる。このような点から、この文献の編纂過程において、まず地獄の記述、特定の主題の挿話などの語りのユニットが存在し、それらをパズルのように、時には前後の文脈に合わせて一部を書き換えながら、全体を組み立てていったこと

がわかる。この語りのユニットの中にはシヴァ教の外部に源を持つものもあるが、それらはいくまでも副次的な位置を与えられ、シヴァ教物語の枠組みの中に組み込まれている。こうした編纂作業は、この文献だけではなく、他のプラーナ文献にも当てはめることができるであろう。以上の考察は、第2B巻(図書②)と第3巻(図書③)の序論の一部として刊行した。

③ 2012年1月に行った北インドでの合同調査は非常に実りあるものとなった。Hardwar周辺、Kalinjar, Mundeshvari 丘での調査では、いずれの場所でも『スカンダプラーナ』内の記述に関連し、この文献の成立期と考えている6~7世紀前後に帰される遺跡・遺物を確認または発見することができた。Mundeshvariは本研究者が博士論文(2004年)の中で、第3巻の第62章に言及されるMandaleshvaraと始めて同定した遺跡であり、本研究者には2回目の現地調査であるが、今回は丘の頂上の寺院遺跡だけではなく、中腹の遺跡も含め、複数のシヴァ寺院がこの丘に当時存在したことを確認した。Kalinjarでは、現存するNilakantha寺院と丘陵全体に散らばる神像やレリーフ等の遺物・碑刻文から、この丘が6~12世紀にかけてパーシュパタ派の修行者集団とバイラヴァ・チャームンダーを信奉するシヴァ教の集団の拠点であったことが判明した。これらの豊富な遺物・碑文はほとんど未調査であり、今後の調査・研究がのぞまれる。もう一つの調査地であるBarbar丘陵域については、本研究者は6世紀に女神像を奉獻したことを記録する刻文が残る洞窟が、8世紀前半に著された長編詩『ガウダヴァホ』で言及される女神寺院であることを提唱しており、調査結果とあわせて8世紀前後のこの丘陵域における女神信仰を含むシヴァ教の状況に関して、2015年6月の世界サンスクリット会議にて報告する(学会発表①)。『スカンダプラーナ』に述べられるシヴァ聖地の中でもっとも東に位置する、北ベンガルのKotivarsa(現Bangarh)には今回の合同調査では行くことができなかったが、本研究者が過去に行った調査結果とこれまでの研究に、ヤーマラ文献に関するHartley博士の最新の研究に基づく知見とパーラ期の関連碑文の研究結果を加えて、3~12世紀にかけて当地の女神信仰がシヴァ教に統合されていく過程を解明した。特に重要なのは、この過程において、単にシヴァ教が土着の女神信仰を包摂のではなく、女神信仰がシヴァ教に大きな影響を与え、女神信仰を核とするシヴァ教の一潮流の形成をうながした可能性が高いという点である。この地域は、6世紀頃からバイラヴァと女神信仰を核とし、ヤーマラ文献を奉じるシヴァ教集団の拠点の一つとなっていたと思われる。またパーラ後期(11~12世紀)にはパーラ王朝の庇護をうけた正統的なシヴァ教の一派がこの地を拠点とするが、女神信仰を重視しないこの

派でさえ、ここでは当地の女神信仰を受け入れていた。以上の成果はグロニンゲンで開催された会議にて報告し、論文として刊行した(学会発表⑨、雑誌論文①)。また前述の図書①のなかの Kotivarsa を扱う章に執筆協力し、附属資料として本研究が校訂した Kotivarsa Mahatmya をともに出版した。

(2) B: 長編詩『カッピナ王の興隆』研究

9世紀前半のカシュミールにおいて作られたこの長編詩は、カッピナ王が仏陀の教えを受けて仏教徒になるという仏教説話をもとにしているために、これまでの研究では仏教詩と考えられてきた。しかし本研究は、Hahnの新しい校訂版を使って作品全体の構造を分析し、シヴァ信徒である作者 Sivasvamin は仏教詩という見かけの下に、シヴァがカッピナ王をシヴァ教の信徒とするという第2の意味レベルを非常に巧みに加え、重層的かつ非常にユニークな作品を作り上げたことを解明した(雑誌論文②、学会発表⑩⑪)。その際、作者は仏教を否定するのではなく、仏陀をシヴァの顕現・化身の1つとみなし、人々を解脱に至る道へと発心させるという意味で、仏教をシヴァ教の入門的段階と位置づけている。この点は当時のカシュミールにおけるシヴァ教と仏教の共存・競合状態を検討するうえで非常に重要である。また、本作品が著された Avantivarman 王の治世では、前王朝のヴィシュヌ教重視からシヴァ教を第1の宗教とする政策に転換したこと、また前王朝末期の混乱を経て内政安定が最重要課題とされたことという二つの面から、本作品がこの王の治世を反映した上で、作者が理想とする王の治世、すなわちシヴァ信徒である王の下での他の宗教の融和、を描こうとしている可能性を提示した(学会発表②、刊行予定の学会論文集の中に論文を執筆予定)。一方、本作品は高度に技巧的な長編詩であるため、個々の章の校訂の見直しと翻訳・解析にはさらに時間を必要とし、研究を継続している(学会発表④⑧)。また2012年6月には、Srinagarにて Avantivarman 王の建立とされる寺院遺跡の調査、およびカシュミールの他のシヴァ神話を扱う詩の写本収集を行った。

(3) C: 中世前期のプラーナ文献におけるシヴァ教神話の形成・発展史

『スカンダプラーナ』以降、12世紀頃までに作られたプラーナ文献群の中で、リング、マツィヤ、ヴァーマナ、クールマの4つのプラーナ文献中のシヴァ神話について調査した結果、多かれ少なかれ、これらのシヴァ神話は『スカンダプラーナ』の影響を受けていることが判明した。特に『ヴァーマナプラーナ』は神話構成においても同文献の影響が顕著である。『スカンダプラーナ』については、最初の成立時の形を伝えるSリセンションと、9世紀頃に大きく改変・拡張された結果成立

した形に由来するRAリセンションとの2種類のテキストが存在したことが明らかになっているが、『ヴァーマナ』は後者のRA本の影響を受けていると思われる。一方、シヴァ教の教理・実践・儀礼など専門的な主題を多く含む『リングプラーナ』を除き、他の3つの作品は全体としてはシヴァ教とヴィシュヌ教を折衷する傾向を示しており、シヴァ神話が『スカンダプラーナ』を源流とするのに対し、ヴィシュヌ神話は『ハリヴァンシャ』と『ヴィシュヌプラーナ』を主たる源流としていると思われる。そのため、これら中世前期のプラーナ文献群における神話生成の方法・過程を解明するには、シヴァ神話だけではなく、ヴィシュヌ神話の発展過程の研究が不可欠になる。そのような認識から、まずシヴァ系神話のモデルとなった『スカンダプラーナ』とヴィシュヌ系神話のモデルを提供する『ヴィシュヌプラーナ』を比較することで、両者の世界観の相違とその社会的・文化的背景を究明するという、新たな研究の方向性を見出した。2017年度からの科研費ではこの新しい研究課題に取り組んでいる。また、『スカンダプラーナ』におけるシヴァ神話体系へのヴィシュヌ神話の統合と、『ヴィシュヌプラーナ』との暫定的・概括的な比較研究の成果をライデン大学における Bakker 教授の引退記念シンポジウムにおいて講演した(学会発表⑦)。国内の研究者向けには、これまでの『スカンダプラーナ』研究を総括するとともに、パーシュパタ研究の最前線の研究状況を解説する講演を龍谷大学にて行った(学会発表③、出版のための原稿執筆中)。

(4) D: 一般信徒のためのシヴァ教の教理と実践

『スカンダプラーナ』中のパーシュパタ・ヨーガ儀軌について、暫定的な校訂・研究を行った結果、このヨーガが一般に古典ヨーガとみなされているパタンジャリの体系ではなく、おそらくより古い伝統を伝えるヒラニヤガルバの体系に連なる可能性が高いことが判明した。また蛇の形をした5種の氣息を含む10種の氣息や、utkranti というヨーガによる自死の技法など、タントラのヨーガの先駆的な要素を多く含んでいる。しかしこの儀軌部分は写本の状態が悪く、他資料にはみられない新しい要素を多く含むため、ウパニシャッドやマハーバーラタの初期ヨーガの記述との比較研究など、より多面的な研究が必要であると判断し、次の研究課題において共同研究の方式をとって多面的に検討することにした。また、シヴァ教法典文献群については、断片的なものも含めて予想以上に古写本が残存しており、この文献群の成立過程が複雑であること、共同研究を続けているライデン大学の Bisschop 教授とその指導下の研究者がこの文献群の写本収集・研究を精力的に行っていることから、この課題についてはライデン大学のチームにゆだね、研究協力を

とおしてその成果を学ぶことにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① Yokochi, Yuko, The Development of Saivism in Kotivarsa, North Bengal, with Special Reference to the Kotivarsa-Mahatmya in the Skandapurana. *Indo-Iranian Journal*, vol. 56, 査読有, 2013, pp.295-324.

DOI: 10.1163/15728536-13560310

② Yokochi, Yuko, Triumph of Buddhism or Saivism?: A Study in the ninth century Kashmirian poem *Kapphinabhyudaya*. *Journal of Indian and Buddhist Studies*, vol.60. 査読有, 2012. pp.1153-60.

③ 横地優子, 「処女戦士が最高神となるとき」, 『アジア女神大全』(青土社), 2011, pp. 345-363. 査読無

[学会発表] (計 11 件)

① Yokochi, Yuko, A goddess shrine in the Gopi Cave on the Nagarjuni Hill and in the Gaudavaho. The 16th World Sanskrit Conference, 2015年6月29日, バンコク(タイ) [発表確定]

② Yokochi, Yuko, An ideal rule by an Initiated Shaiva king described in a Kashmirian courtly poem. *Tantric Communities in Context: VISCOM conference*. 2015年2月6日, ウィーン(オーストリア)

③ 横地優子, 中世ヒンドゥー教における神話形成—シヴァ信仰と女神信仰の台頭—, 龍谷大学現代インド研究センター伝統思想研究会, 2014年11月25日, 龍谷大学(京都府京都市) [招待講演]

④ 横地優子, 詩の解釈における享受者の役割: 『*Kapphinabhyudaya*』研究, 日本印度学仏教学会第65回学術大会, 2014年8月30日, 武蔵野大学(東京都江東区)

⑤ Yokochi, Yuko & Peter Bisschop, The Birth of Skanda: Reading Chapter 72 of the Skandapurana. *History of Saivism: Readings in Inscriptions and Early Manuscripts*. 2014年3月28日, パリ(フランス)

⑥ 横地優子, 獅子がひく戦車にのる女神—蜂の女神・ヴィンディヤ山の女神・キュベレー—, 第71回羽田記念館定例講演会, 2013年12月7日, ユーラシア文化研究センター(京都府京都市) [招待講演]

⑦ Yokochi, Yuko, The Systematization of the Shaiva mythology: A challenge by the Skandapurana. *VVIK Symposium 'The Study of the History of Hinduism in the Sanskrit Tradition: New Research and Recent Directions'*, 2013年9月28日, ライ

デン(オランダ) [招待講演]

⑧ 横地優子, 『*Kapphinabhyudaya*』に言及されるシヴァ教マントラ道の教義と実践, 日本印度学仏教学会第64回学術大会, 2013年9月1日, 島根県民会館(島根県松江市)

⑨ Yokochi, Yuko, The development of Shaivism in Kotivarsa in the Pala period: A comparison between the Skandapurana and epigraphical evidence. *Epigraphical Evidence for the Formation and Rise of Early Shaivism: The Religious Landscape at the time of the Composition and Spread of the Skandapurana*. 2012年6月4日, グロニンゲン(オランダ)

⑩ Yokochi, Yuko, Triumph of Buddhism or Shaivism?: A ninth century Kashmirian poem *Kapphinabhyudaya*. *The 15th World Sanskrit Conference*. 2012年1月7日, デリー(インド)

⑪ 横地優子, 仏教の勝利に偽装したシヴァ教の勝利—9世紀カシュミールの長編詩『*Kapphinabhyudaya*』研究—, 日本印度学仏教学会第63回学術大会, 2011年9月7日, 龍谷大学(京都府京都市)

[図書] (計 3 件)

① Bakker, Hans T., in cooperation with Yuko Yokochi for Chapter 'the Goddess from the East' (pp.241-261) and with the Appendix 'The Kotivarsa Mahatmya of the Skandapurana' by Yuko Yokochi (pp.263-269), Brill (Leiden), *The World of the Skandapurana. Northern India in the Sixth and Seventh Centuries*. 2014. xv + 316 pp.

② Bakker, Hans T., Peter C. Bisschop, and Yuko Yokochi, in cooperation with Nina Murnig and Judit Torzsok, Brill (Leiden), *The Skandapurana Volume IIB, Adhyayas 31-52. The Vahana and Naraka Cycles. Critical Edition with an Introduction & Annotated English Synopsis*. 2014. xii + 372 pp.

③ Yokochi, Yuko, Egbert Forsten (Groningen) & Brill (Leiden), *The Skandapurana Volume III, Adhyayas 34.1-61, 53-69. The Vindhyaivasini Cycle. Critical Edition with an Introduction & Annotated English Synopsis*. 2013. x + 401 pp.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

<https://kyouindb.iimc.kyoto-u.ac.jp/j/q>

[11pR](#)

<https://kyoto-u.academia.edu/YukoYokochi/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横地 優子 (YOKOCHI, Yuko)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：30230650

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：